効果的な英語教育の要因に関する考察：信州大学のケースから

川　出　才　紀

本稿の目的は，英語教育において，どのような授業方法・内容，どのような学習環境が効果的であるかを調べ，授業づくりの尺度を考えることである。本稿の構成は以下の通りである。

Ⅰ．授業の方法・内容（平成9年度）
A．前期
ⅰ．内容
ⅱ．課題・提出物
ⅲ．補足説明
ⅳ．反省と改善点
B．後期
ⅰ．内容
ⅱ．課題・提出物
ⅲ．補足説明
ⅳ．反省と改善点
Ⅱ．学生へのアンケートと結果分析
A．授業方法・内容
ⅰ．アンケート
ⅱ．結果分析
ⅲ．授業方法・内容のまとめ
B．学習環境について
ⅰ．クラスによる達成度の違い
ⅱ．動機づけについて
ⅲ．学習環境のまとめ
Ⅲ．結論
A．授業方法・内容
B．学習環境
Ⅳ．最後に

Ⅰ．授業の方法・内容

まず，この授業（週一回・90分）で行ったことの概要，補足説明そして若干の反省点を前後期に分けて以下に示す。この授業では，教師が知識を伝授する講義の要素をできるだけ少なくし，学生自らが読んだり，書いたり，話したり，考えたりできるように工夫した。教師の介入を減らし，“navigator”，“coordinator”に徹するよう心がけた。語学のような運用力が関わる科目では，学生自身が練習することが不可欠だからである。

A．前　期

ⅰ．内容

1．基本語についての講義3時間
2．英語による自己紹介（クラス全員）とクラス員による自己紹介の評価
3．テキストの音読と音読試験
4．環境問題に関するテキストの読解（内容把握）と問題
5．自習書の小テスト計4回

ⅱ．課題・提出物

6．年頭の決意（日本語）
7．自己紹介文（英語）
8．自己紹介の評価（英語）
9．インターネットサーフィンレポート（英語）

iii．補足説明―授業内容と課題・提出物の目的

上記1―5を実際に授業運営するに際して留意した点は以下の通りである。

1．ことばのおもしろさに触れてもらい，関心を呼び起こす為に，語彙に関する講義を行う。
2．クラス員同士のことを良く知り合うために，早い時期に自己紹介を行う。また後期のクラス発表に慣れてもらうという意味もある。他人の自己紹介を聞く際に退屈しないようにとの配慮から，3段階の評価，要点のメモ，感想を一覧表に記入してもらうこととした。これはリスニングとノートテイキングの訓練にもなるとの配慮からである。
3．人前で話すのが億劫にならないように，また発音がある程度きちんとできるように前期は音読に重点を置くこととした。更に「発音できる音，知っている語は聞き取れる」「正しくすらすら発音できれば黙読も早くできるようになる」と判断して，授業ではリスニングよりも音読を優先にした。リスニングに関しては，テープを聞きながら自宅練習を行ってもらい，補強してもらうこととした。また自宅学習を確実に実行してもらうために，音読の試験を課すこととした。これは初級者にとっては音読から入るのが容易であるとも考えたからである。
4．精読よりも，「限られた時間内に必要な情報を得る」ことを目的とした内容把握を目指した。これは教師の質問に答えさせる形で実施した。精読はこれまで中学高校でずっとやってきていると判断したこと，また出来るだけ英文を多く読んでもらうことが実力の向上につながると考えたからである。更に，精読が習慣となってしまうと「細かい所に目が行き，全体が見渡せない」「間違うことを極端に恐れる」などの弊害が出ることを懸念したためである。
5．授業で使うテキストだけでは読書量が充分ではないと考え，副読本を自宅で速読してもらうこととし，それが確実に実行されるよう，小テストを課した。

iv．反省と改善点

実際に授業を終え，自己評価をしてみると，次のような反省点が上がってきた。

1．基本語についての講義：ことばに対して興味が湧き，新しい見方をするようになった。
2及び8．英語による自己紹介とクラス員による自己紹介の評価：学生の思わぬ一面がわかったり，クラスの雰囲気をなごやかにする効果があり，学生も楽しげであった。ただし学生の声が聞き取りにくい場合，リスニングとノートテイキングの練習にはならないので，この点に関し，今後は工夫が必要である。
3．テキストの音読と音読試験：特に初級の学生の英語力を上げるのに効果があると思われた。ある程度うまく読めるようになると自信もつき，人前で声を出すことに抵抗が少なくなる。また何度も読んでいるうちに，意味もなんとなくわかってくるという声が多かった。
4．環境問題に関するテキストの読解（内容把握）と問題：テキストをあらかじめ読んで来

るように指示したが，実行してくる学生は少なく，その為授業時間を費やし，退屈な時間となってしまった。それに加えて多人数クラスでは，特に一人の学生が答えている間，他の学生が手持ち無沙汰になってしまうので，後期はこの点を反省し，要旨を個人やグループで書かせたりした。グループ内で助け合い，要旨を探らせるのも良いかと思われる。ただし中には全訳を書く者がいるので，要点を摑む練習もすべきと思われる。またほとんどの学生は，粗方の意味を訳すことはできることから，さらに発展的な作業が必要と感じられた。例えば分野ごとの語彙の整理であるとか，読んだことをベースにグループで討論し，自分の意見をまとめるなどが考えられる。後期はグループ討論と，意見をまとめる作業を取り入れるようにした。

5．自習書の小テスト：副読本を持たせたことは良かったようである。最初は時間がかかったが，だんだん早く読めるようになったという声が多かった。ただし，いちいち辞書を引いて全訳しないと気がすまない者もいる。辞書を引く時間がないように，ある程度一回の読書量を多くしたつもりであったが，あまり分量が多すぎると，今度は読む気が起こらないという意見もあり，課題の分量調節と学生の動機づけの難しさを感じる。

6．年頭の決意：目標を設定させることは心構えを生み，学生の動機づけにつながるので良い。また学生の動機づけを強める為に，シラバスに課題の目的を明記するようにしたい。

7．自己紹介文：あまりじっくり考えて書くテーマではないが，いきなり難しいテーマについて書くよりも，最初の作文課題としては取っつきやすかったようだ。

9．インターネットサーフィンレポート：マシンの順番待ちと画面が出るまでの時間がかかって大変であるが，この時期にやり方を覚えてしまうと，その後，調べものをするのに何かと重宝するようである。最近は就職情報を載せたり，仕事にパソコンが必要という企業も増え，これに慣れておくことは将来有効であると考えられ，継続したい課題である。

その他．シラバスは，毎回の授業で行う範囲を細かく設定してしまったので，進度がわかりやすい反面，時間内に予定の所まで終わらなかったり，学生のその時の雰囲気によって，臨機応変に授業を行うことができなかったりしたこともあった。後期は調整日を設けて，そこで遅れた分を取り戻したり，予定にはなかったことを行うなど計画に余裕をもたせた。

B．後　期

ｉ．内容

1．前期に指定された者のみ再読試験
2．グループによるゲーム１回
3．自習書の小テスト計３回
4．テキスト，ビデオと新聞・雑誌の記事の内容把握
5．グループ討論
6．グループ発表２回（テーマの設定，計画表提出，討論，アンケート調査，分析，発表）
7．グループの評価（英語）

ii．　課題・提出物

8．英作文４編

9．グループ発表の報告書１編
10．グループ発表の評価（グループの数により５～８）
11．テキストの内容把握とまとめ（日本語３）

iii．補足説明

1．夏休みというまとまった時間にできるだけ遅れを取り戻し，英語離れさせないという目的で，休み明けに再読試験を課した。
2．グループによるゲームは，ゲームという非威嚇的な雰囲気の中で，お互いを良く知り，壁を取り去り，最終的にグループ討論の活性化を図ることを目的に行った。
3．前期の補足説明を参照。
4．内容把握は，テキスト，新聞・雑誌の記事から必要な情報を得る練習と，英作文のテーマを与える目的で行った。
5．内容把握したテーマについてグループで討論してもらう。不明点を仲間同士で確認してもらうことと，語学学習の目標であるコミュニケーションを実際に行ってもらうのが目的である。グループ討論というと，語学学習の観点からは少しまわり道のようであるが，英語という表現技術がうまくなっても，表現する内容が貧弱では何もならないとの考えから採用した。グループ討論の目的は：討論する中で，学生の興味を引き出し，考えさせ，その考えをまとめさせ，相手を納得，説得させるような意見のやりとりの仕方を経験させる。自分の意見に固執しないで，他人の意見の中にも優れた点を見い出せば，自分の意見を修正する勇気を持ち，より良いものを協力して生み出す過程や，問題解決の糸口を辛抱強く見つける過程を体験する。更に，世の中には様々な考えを持つ人がいることを知り，個人の意見が他人と異なっていても，それが他人を個人攻撃することにはならず，基本的な人間関係は築いていけるということを学ぶ，自分とは異なる多くの意見に触れることで，傷つくことに対する免疫力をつけるなどである。ここでは，英語という技術・道具を身につけるのではなく，「思考力」「コミュニケーション能力」を磨くことも視野に入れている。
6．グループ発表については，第１回めは，後期のはじめに「夏休み一番印象に残ったこと」について絵を描いてもらい，その絵をもとにグループの代表にグループ員の経験談を説明する。代表は今度はそれをクラス全員に英語で紹介する。代表は，他者の意見の要点をまとめ，人前で効果的に話すことを要求される。絵は，動機づけと，話しを理解する助けとする為に描いてもらう。

第２回目は，主にテキストからテーマをひとつ選び，アンケートやインタビューなど，実地の調査を分析し，レポートにまとめあげたものを発表してもらう。テーマを設定してもらった後，調査の計画表（目的，意義，斬新な点，スケジュール）を提出してもらい，教師のOKが出れば早速準備にかかってもらう。これは，企業や研究所でプレゼンテーションを行うことを想定して，最低限の経験を積んでおくという目的から行った。

7及び10．自己紹介の時と同様，グループ発表を行っている間，聞いている者が退屈しないように，さらにリスニングとノートテイキングの練習になるようにとの配慮から，発表グループの評価を英語で簡単に書いてもらった。

8．テキスト・ビデオ・新聞・雑誌の記事から取ったテーマ４つについて，150語程度で感

想・意見をまとめさせる。

9．図書館などで調べたことをあちこち切り張りするのではなく，必ず自分の足で稼いだデータを用いてレポートを出させた。これは，盗用ではなくオリジナルな意見や考えを聞きたいという意味からでもある。グループ発表の報告書（レポート）を書かせたのは，グループの成員全員が参加協力するようにとの配慮からである。

11．決められた時間で必要な情報を得，要点をまとめる目的のため，テキストの内容把握とまとめを課した。

iv．反省と改善点

1．再読試験：指定された者だけであったが，再読試験を課すことによって，夏休みも英語離れせず，まとまった時間音読練習ができ，効果があったといえよう。できれば他の者にも英語を習慣化できるような課題を与えたい。

2．グループによるゲーム：討論が活発に行われないグループもあったが，これにより，メンバーはお互いをよりよく知ることができ，発言がしやすくなったなどの効果があった。

3．自習書の小テスト：英語離れしない方法の一つとして有効であると判断できる。

4．テキスト，ビデオと新聞・雑誌の記事の内容把握：ビデオを見てもらい，その内容についてグループで討論し，討論する中で，自分の意見を形作ってもらう。マルチメディア自習室があれば，学生が自分でビデオを見ることができ，授業時間をさらに効率的に使えるということがある。また学生は自分の速度に合わせて繰り返しビデオを見ることもできる。この点に関しては，ぜひスタッフつきの施設が欲しい。

新聞・雑誌の記事の専門用語／重要語句を一覧にしたのは，学生にも好評であった。一覧表をみれば，その話題に関して討論ができ，作文にも応用できる。ある程度慣れたら，分野の語彙のリストを学生自身に作らせるのも良いだろう。分野ごとに語彙をまとめておく方が応用範囲が広がり，学生にとっても覚えやすい。これは今後も続けたい。

5．グループ討論：理想的には英語で行うべきである。が，学生自身が討論することに慣れていない上，いきなり英語で話すとなると，かなりの負担になるらしく少しも「話しがはずまない」為，日本語でやることとした。討論を最終的に英語でやる際には，専門用語／重要語句の一覧を作るなどの準備を行ってからの方が良いと感じられた。また日頃から「考える」「考えをまとめる」「意見をわかりやすく発表する」訓練の必要性を痛感する。

6．グループ発表２回（テーマの設定，計画表提出，討論，アンケート調査，分析，発表）：クラスの人数が多いので，グループの代表のみが発表する形をとったが，グループの中に，活動的なものとそうでない者が出て不公平感が生じた。発表には何も貢献せず，レポートのみを提出した学生は動機づけが足りなかったということであり，今後は更に教師の側の努力と工夫が必要である。やはりクラス員全員が発表できるにこしたことはない。ただし，多人数クラスでは，逆に発表が長時間におよび，聞く者が退屈してしまう。発表者の声が小さくて聞き取りにくい，人前での発表に慣れておらず，手際良く発表できない為，時間が有効に使えない場合は特にそうである。この点を解消しなければならない。「人前で意見を言う技術」を向上させる為に何らかの手を打たなければならないことを痛感した。日本人は（私自身も含め）概して，欧米人と比べると，「相手にわかりやすく伝

える」のは下手であると考えられる。これに対処するには，例えば外国人講師による Speech の授業なども積極的に取り入れることを考えるべきではないだろうか。

発表は，内容的には不十分な点はあったが，今後学生の側に何らかの必要性が生まれた時，自ら計画を立て，自分の足で動けるよう準備しておくという意味では成果はあったと考えられる。英語以前の考え方自体が未熟という問題も明らかになり，「考えさせる授業」「意見を述べやすい非威嚇的な雰囲気作り」の重要性を痛感させられた。以上のような点を考慮して，筆者の次年度の授業には前期の早い時点から「考えさせ」「意見を言わせる」ことを目的とするグループ討論を取り入れたい。グループ発表についてはクラスの様子を見ながら取り入れていきたい。

7．グループの評価（英語）8．英作文　9．グループ発表の報告書：一定の時間内に思ったことをまとめる練習は効果的であったという声が意外に多かった。これは，学生にとってもかなりきつい作業であったようだが，取り組み方によっては，最も達成感の得られるものでもあった（詳しくは本文参照）。

10．テキストの内容把握とまとめ：前期は学生を指名し，テキストの内容を口頭で説明してもらったが，学生が必ずしも予習して来ず，発表に時間がかかったり，残りの学生が退屈したりで，授業のテンポが遅くなってしまった。後期は個人やグループで要旨を日本語でまとめてもらったが，これはテキストの英文を書き写しただけでは効果がないと考えたからである。しかし，最終的にはテキストの表現と異なった英語で，或いはテキストを見ずに要旨をまとめてもらうのが理想かもしれない。初級レベルの学生には，意味を把握できる所があれば，精訳でなくとも良いので取っつきやすいやり方と思われる。中級以上の学生には，今後は文章の構成に目を向けさせ，英語の文章に特徴的な構成法に慣れてもらうのも効果があると思われる。

II．学生へのアンケートと結果分析

A．授業方法・内容

i．アンケート

さて，学年度末に，1年間の授業に関するアンケートを実施した。筆者の担当クラスは様々な学科学部ごとの6クラス（仮にA－Fとする）で，それぞれの人数は前期後期で若干の変動はあるが，A-29人，B-35人，C-42人，D-44人，E-29人，F-50人，計229人（うちアンケート回収率は82.5%）である。アンケートは自由回答とし，質問は以下の通りである。

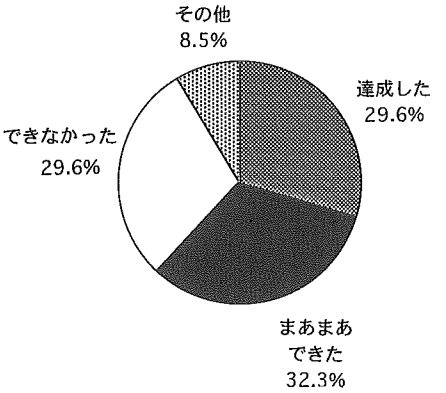
1．この1年間，英語を頑張って勉強でき，年頭の目標を達成することができましたか。
2．どのようにすれば英語力がつくと思いますか。（複数回答）
3．この授業は難しかったですか，易しかったですか。
4．この授業で，英語力をつけるのに役に立ったのは，どのような所ですか。（複数回答）
5．この授業で改善してほしいところはどういう所ですか。（複数回答）

ii．結果分析

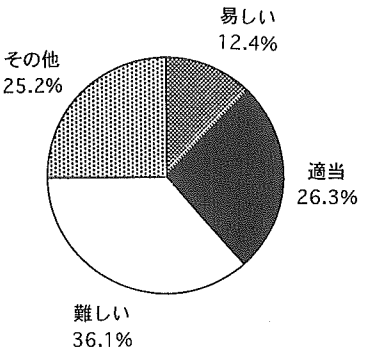
—質問1—

この授業では，年度の初めに年頭の決意文，つまり「どのような英語を，どのように勉強したいか」１年間の学習の目標を書いてもらっている。（授業内容と，それに関する補足説明を参照。）質問(1)の「この１年間，英語を頑張って勉強でき，年頭の目標を達成することができたか」に対しては，「達成できた」と「できなかった」が同数で，それぞれ29.6％ずつであった（グラフ１）。「達成できた」と「まあまあ達成できた」を合わせると61.9％で，全体の３分の２が目標をほぼ達成できたことになる。

グラフ(1)　達成度



グラフ(2)　難易度



―質問３―

質問(3)の「この授業が難しかったか，易しかったか」に関しては，「難しかった」者が36.1％，「適当であった，難しい時も易しい時もあった」が26.3％，「易しかった」が12.4％であり，授業の難易度としてはほぼ妥当な線ではないかと思われる。ただし，その他の回答として，「難しいというより大変だった」が25.3％あり，課題の多さを指摘するものが多かった（グラフ２）。

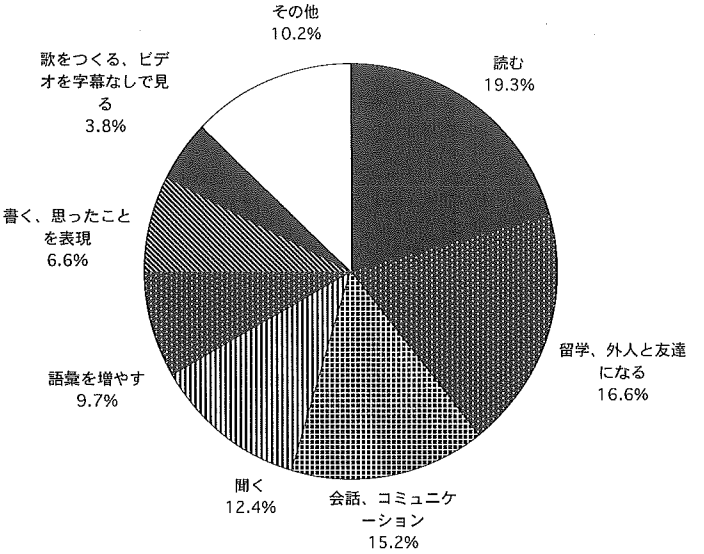
―質問２―

質問(2)（複数回答）の「どのようにすれば英語力がつくと思うか」に対しては，「コツコツやる，毎日英語に触れる，環境作り，慣れる，反復」がトップで56人（全体の19.3％），「読む（含む：多量に読む）」が48人（同16.6％），「留学，ホームステイする，外国人と友達になる，文通する」が44人（15.2％），「会話，コミュニケーション」が36人（12.4％），「聞く」が28人（9.7％）と続く（グラフ３）。次の「語彙を増やす」（19人―6.6％），「書く」（18人―6.2％），「歌をつくる，ビデオを字幕なしで見る」（11人―3.8％）も学生が英語力を伸ばすのに必要と考えている項目である。その他の回答としては，「興味をもつ」「音読」「復習する」等があった。やはり，語学は「毎日続けてコツコツやる」ことが重要であることは学生自身もわかっていることであると推察される。

「コツコツやる」「留学する」など，英語を使わなければならないような状況に身を置くことが英語上達の道であるようだ。例えば，「朝起きるとすぐカセットのスイッチを入れて英語のテープを聞き，朝食を食べながら英字新聞に目を通す。昼は英語母国語話者の友人と

会話し，或いは文通し，夜はビデオを観たり，好きな歌を英語に直したり，夏休みには語学研修に出かける」という具合に，できるだけ英語を生活の中に取り入れて，英語に触れる時間を多くする，それを習慣化してしまうということであろう。

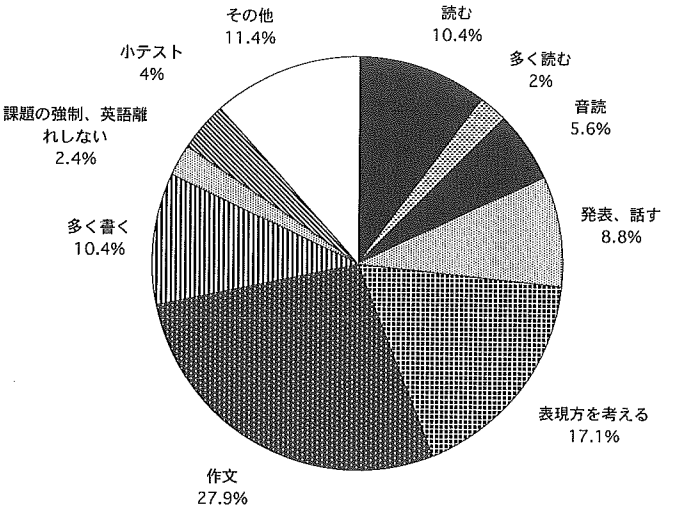
グラフ(3)　英語力をつけるには



—質問４—

では，質問(4)の，実際に「この授業で英語力をつけるのに役に立ったのは，どのような所か」に対しては，「作文」（73人—27.9%）という回答が最も多かった（グラフ４）。

グラフ(4)　この授業で役立ったこと



この授業では，前期は「読み」に重点を置き，後期は「作文」に重点を置いている。アンケートを実施した時期が後期ということも影響しているであろうが，「作文」という作業が英語力の向上に役だったと実感している者が最も多かったのは間違いないようである。「作文」という回答と並んで43人（17.1%）は，「表現方法を考える」ことが役立ったと指摘している。この授業では，「自分を表現する（書き，話す）時には，如何に相手にわかりやすく伝えるかということを念頭に置く」ように指示している。「ただ何となく書く」のではなく，「意識しながら」「考えて書く」点が良かったというのである。語学学習には機械的な訓練が付き物であるとは言え，なにも考えずにやるよりは，意識を集中させてやることが大変重要であることがわかる。「今やっていることは何か」が学生によって意識されていることと，「何の為にやっているか」という目的がはっきり解っていることが大事なのであって，機械的な作業を，受動的な態度でこなすだけでは，投入した時間に見合う効果は得られないのではないか。つまり学生の意識が開かれている状態が良いということである。この授業では，テキストの予め決められた日本文を英語に直す作業ではなく，テーマこそ決まっているものの，自分の意見を思ったまま書く自由作文の形式を取っている。学生の側に書きたいことが生まれた時には，作文する行為の中に「伝えたい」という気持が強く働き，それだけ一生懸命，力を注ぐことになる。つまり，書くことに対する動機づけが強いことになり，表現を考えることが生きた学習になる。表現したい気持が，その課題への積極的参加を促すという当り前といえば当り前のことが起こるわけである。学生があまり乗り気にならなかったテーマでは，動機づけが低く，内容・文法とも貧弱で，訴えるものが少ない作文となるようである。この授業で出された５つの作文のテーマごとに，評価の平均を出してみた。なお評価は最高４点から０点まで0.5点刻みでつけている。

表１　作文の評価

作　文	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
評価　（点）	1.84	2.35	2.54	2.37	2.32

作文テーマ　(1)　夏休みで最も印象に残ったこと
(2)　食品添加物と社会
(3)　チェルノブイリのその後
(4)　環境ホルモンについて
(5)　グループ発表レポート

これによると，(3)の「チェルノブイリのその後」に関する英作が最も評価が高く，胸に響く内容のものも多かったように思う。このことから，テーマの選択とそのテーマに対して，どれだけ学生に興味を持たせられるかが，重要となるわけである。後述の，「この授業の改善点」を尋ねた質問(5)に対して「違うテーマについてもやりたい」という意見があったが，今後は作文のテーマの選択に，さらに注意を払う必要があると感じられる。

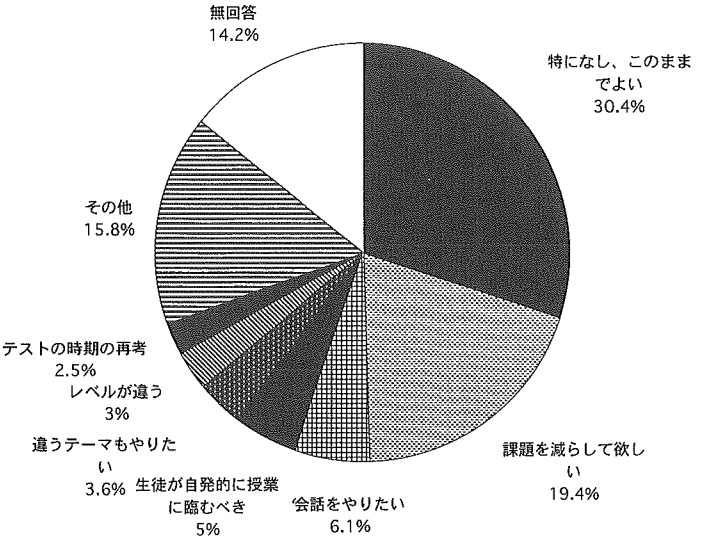
またこの他に「多く書く」ことが役立ったという回答は26人（10.4%）である。この「多くやる」という要素も回答には多く含まれていた。「課題の強制，英語離れしない」という回答も「多くやる」ことだと解釈すると，「多くやる」（つまり「多く書く（26人―10.4%）」「多く読む（５人―２%）」「課題の強制，英語離れしない（６人―2.4%）」の３つの回答を

合わせると）37人（14.8%）になる。先ほどの質問(2)の「コツコツやる，毎日英語に触れる，環境作り，慣れる，反復」にも通ずる，この「多くやる」ことが語学力の向上には，大切なのだろう。苦労を伴うプロセスを経て，達成感が生まれるということである。

この授業では，後期は特に「書く」ことに重点を置いたが，「読む」「話す」「聞く」に重点を置いた授業でも，「多くやる」ことが大事な要素であろうことは容易に推測される。（ここでは「読む」「書く」「聞く」「話す」のいずれに（或いはどの組み合わせに）重点を置く授業が効果的か，という問題については立ち入っていない。）

その他の少数意見としては，1.「基本語の講義が役立った」2.「授業を受けて，今後の勉強方針がわかった」3.「細かい文法にとらわれないので英語が身近になった」等がある。授業をやる中で，学生の英語力向上の成果を出すことが最も望ましいのであるが，就職や受験，海外赴任等で，自分が本当に英語を必要とする時のために，学習方法の取っ掛かりができることは，その次に望ましいことであろう。

グラフ(5)　授業の改善点

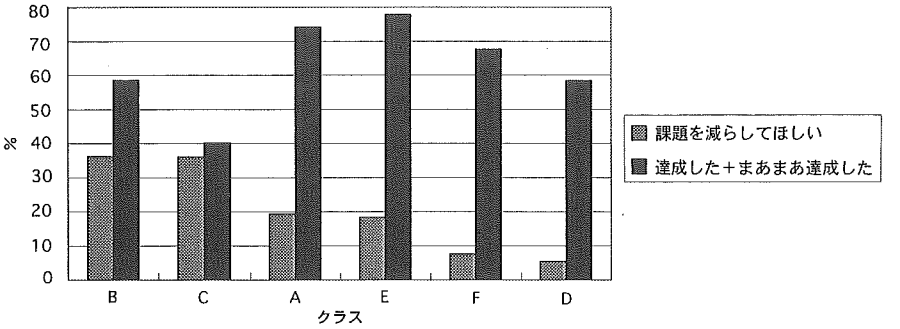


―質問５―

次にアンケートの質問(5)の「この授業で改善してほしいところはどういう所か」について見ていこう。①「特になし，このままでよい（58人―30.4%）」が最も多く，３分の１弱の学生は，このような授業で良いと感じているようである（グラフ５）。その次に多かったのは②「課題を減らして欲しい（37人―19.4%）」である。確かにこの授業の課題は多い。中でも作文の課題が大変だったようである。課題は，米国の大学と同程度か，もしくは少なめに設定したつもりであったが，やはり他の科目の課題と重なった時は学生の負担が大きいので，来期は課題提出の時期などについて考慮すべきであろう。ただし，課題を極端に少なくしてしまうと，英語力の向上に大切な「多くやる」「コツコツやる」という要素が抜けてしまうので，その点は注意が必要である。先ほどの質問(2)で，「英語力をつけるには，毎日続けてコツコツやること」が最も大切であるという結果が出たことからすると，学生自身もそ

のことは，わかっているのだが，現実に課題をこなすとなると，話しはまた別のようである。次のようなことも可能性として考えられる。「毎日コツコツやる」課題が，自分から進んでやるものなのか，強制されてやるものなのか，によっても結果は違ってくるということである―つまり動機づけの問題である。動機づけがなされていれば，どんなに課題が困難であっても，学生はこなしてしまうだろうし，動機づけがうまくいっていなければ，どんなに教師ががんばっても学生は嫌々勉強することになり，努力の割には英語が身につかないというこ

グラフ(6)　課題を減らす要望と達成度との関係



とになろう。

「課題が多い」ことに関しては，あるクラスでは，同じ量の課題であっても，それが，むしろ「達成感」につながり，満足できたという学生が多くいた。反対に達成度の低いクラスでは，課題の多さを指摘する者が多かった（グラフ６）。この違いを生み出したものは何であろうか（これに関しては後述する）。

その他の要望では③「会話をやりたい（12人―6.1%）」④「違うテーマについてもやりたい（７人―3.6%）」⑤「クラスのレベルが違う（６人―３%）」⑥「テストの時期を再考してほしい（５人―2.5%）」等がある。③については，多くの者が，この授業の他に外国人教師による会話クラスを受講しているので，ここでは「話す」ことに，それほど多くの時間を割かなかった。が，一部の学生で会話クラスの受講ができない者には，もう少し授業の中で「会話」の要素を多く取り入れても良かったかもしれない。

④については，学生が理系の学部対象であったため，テキストには環境問題を扱ったものを採用したが，今後は，違ったテーマも授業に取り入れるべきであろう。特に前期は，もう少し学生の身近な問題から入って行くのも良いかもしれない。ただし，「環境問題がおもしろかったので，最初からやりたかった」という学生もいた。

⑤今年度は能力別クラスではなかったので，特に英語に対して苦手意識を持っている学生には授業や課題のレベルが高いと感じられたようである。それらの学生にとって，前期の音読は効果があり良かったが，後期の作文には随分苦労したようである。確かに，後期はある程度英語が書ける学生が，更に能力を伸ばすのに適した授業展開ではあった。今後はクラスをレベル分けするなどして，更に細かい学生のニーズに合わせた授業を行う必要があろう。平成10年度は，日本人教師による授業もぜひレベル分けを行いたい。

⑥小テストの時期は，前期は隔週に４回，後期は毎週続けて３回行った。「隔週だと試験

の期日を忘れてしまう」という要求により後期は毎週続けて実施したのであるが，今度は「毎週あると忙しい」という者が出てきた。学生の要求は様々であるということを胆に銘じたい。

その他の希望としては，少数ながら⑦「英語放送が見たい」⑧「LL 教室が使いたい」⑨「少人数クラスにしてほしい」⑩「語彙力を増やしてほしい」⑪「聞き取りをやってほしい」⑫「文法をもっと教えてほしい」⑬「発表が恥ずかしいのでやめてほしい」等がある。⑧⑨に関しては，スタッフつきマルチメディア自習室があれば良いと痛切に感じる。⑨に関しては現段階では，英語を選択制にすることで実現がはかれるだろう。⑩の「語彙力を増やす」に関しては，今後の課題である。筆者は，多読することで，繰り返し出てくる重要な語・表現は身につくであろうし，文脈の中で覚えるのが良いと考えていたのだが，それだけでは充分ではないようである。たとえば，現在行っている多読に加えて，今後は更に，分野ごとによく使われる語を整理するのも有効であろう。⑫については，この授業では，コミュニケーションすることを第一に考え，少々の間違いには目をつぶった。細かい文法を気にしすぎて何も言えないよりは，まず伝えたいことが伝えられる方が良いと判断したからである。しかし，中には「自分は理系なので，理屈で教えてもらった方が理解しやすい」という意見もあった。大人の学習者には，もう少し理詰めの文法説明も，時期を見計らいながら，取り入れてみるのも良いかもしれない。つまり，この授業は運用力-自動性を高めることに重点を置いているが，学生によっては知識の明示性を高める欲求があるのである（川出他 1985）。⑬に関しては，人前で話すことの苦手な日本人に，如何に威嚇的でない（non-threatening）環境を与えられるかという問題の難しさを改めて感じさせられる。これを克服するには，クラスサイズが小さい方が好都合であろうし，「人前で失敗しても良い」のだということを，教師が今まで以上に強く訴える必要もあろう。クラス員同士がもっと良く知り合えるような工夫も必要だ。英語ができること・できないことが個人の人格とは関係がなく，意見の違いが相手を個人攻撃することでもないということをわからせるには，どうすれば良いのか。「（人前での）発表が恥ずかしい……」というのは少数意見ながら，日本人学習者と学習態度の根本に関わる問題である。米国の私立大に留学した学生の意見が，日本と米国の学習スタイルの違いを披露してくれる。「（米国の）学生はみな積極的で，教授をさしおいてでも自分の意見を主張したがる」「課題の文献が多く，何かあるごとにリポート，発表，討論。小クラスは討論できるように十人まで。講義は七，八十人まで。国際関係専攻でも哲学が必修で，プラトンなど古典をみっちり読ませられた。三十人前後の一般教養でも必ず発表が回ってきた。」（6月11日付け朝日新聞）この問題に関しては，今後も根気よく考えていかなければならない。

iii．授業方法・内容のまとめ

さて，ここでこれまでのところをまとめてみると，この授業に関して効果的だと思われる課題内容としては，自由作文がある。これが良かった理由は，与えたテーマによって，学生の伝えたい気持ちを引き出せた／如何にうまく相手に伝えられるかを考えながら書けた／課題を多くやり，英語離れしなかった，またその中で，学生が達成感を得られたという要素が含まれていたからであろう。①学生が「今やっていることが何か」がわかっており，そこに

意識を集中させ，考えながらやる ②英語離れしない ③伝えたい気持を起こす授業が良いということになる。つまり，学生にとって大事なのは次の点である：

1．学生の意識を開かせ，興味関心を持続させる
2．苦労をともなう学習プロセスを体験させる
3．自己表現と主体的・積極的に関わる

これらの要素は，「読む」「聞く」「話す」の他の技能にも適用できるものであり，これらを授業にうまく取り入れることができれば学習も効果が上がるであろう。

B．学習環境について

i．クラスによる達成度の違い

さてここで，クラスによって，目標の達成度に違いがあり，達成感や満足感の違いを生み出した要因について考えてみたい。まず，個々のクラスの達成度（グラフ6参照）を見てみよう。年頭の目標が「達成できた」「まあまあ達成できた」を合わせるとクラス毎の結果は以下のようになる。

A＝74%　B＝58%　C＝40%　D＝58%　E＝78%　F＝67%

これにクラス員の人数を対応させ，達成度の高いものから並べてみると表2のようになる。

表2　達成度とクラスの構成人数

順　位	クラス	達　成　度	構　成　人　数
1　位	E	E＝78%	29人
2　位	A	A＝74%	29人
3　位	F	F＝67%	50人（後期45人）
4　位	D B	D＝58% B＝58%	44人 35人
5　位	C	C＝40%	42人

表2の達成度の高いクラスは，EとAである。センター試験の自己採点点の平均（表3参

表3　センター試験の自己採点点と前期・後期の成績

クラス	センター試験	前期成績	後期成績	前後期の成績の差
A	149.03	2.59	2.66	+0.07
B	149.57	2.09	2.0	−0.09
C	159.88	2.32	2.35	+0.03
D	150.88	2.26	2.29	+0.03
E	149.93	2.45	2.53	+0.08
F	145.48	2.34	2.36	+0.02

照）は，Ｃクラスが最も高い。ところが，１年後のＣクラスの年度末の成績の平均（３点から０点までの４段階評価）は，４位になってしまった。単純に比較することはできないが，センター試験の自己採点点と比べると成績はＡ，ＥとＣクラスでは，逆転してしまった。この原因について考えてみたい。

１位と２位のクラス（ＡおよびＥ）はいずれも29人の少人数クラスであり，どちらかといえば，達成度に関しては，少人数クラスの方が有利であるといえそうである。表３の前後期の成績を見ても，ＡとＥは６クラスの中で最も伸び率が高い。ＡおよびＥの少人数クラスの方が，教育環境という面からすると何かと有利であることは否めない。学生がクラスで発表する機会も多いであろうし，何よりもクラス員全員が参加するのだという雰囲気が維持されやすい。多人数の中で自分一人がさぼっていてもわからないという受動的な態度を排除しやすいからである。教師の目も隅々まで届き，学生の動機づけを維持させやすい，学生が落伍してしまうのを事前に食い止めることも可能である，教育上効果的といわれる適度の緊張を保ち易いなどの利点があるといえる。小学校の例ではあるが，「25人の教室なら，子どもたち全員に目が届きやすい。一対一で子どもと向き合う時間も増やせる。35人を超えると，教壇から見て視野に入りにくい子が出る」「二十数人くらいが，子どもの生の声が聞きやすい」という教師の声がある（６月８日付け朝日新聞）。

Ｂクラスがやや少人数（35人）であるにも関わらず，達成度がそれほど高くない。その理由として考えられるのは，学習レベルの開きの大きさである。このクラスはこの授業が「易しい」と「まあまあ」と答えた者が合わせて54％にも上り（表４参照），英語が非常に得意な学生の多いクラスであった。反対に，英語のやや苦手な学生も少なからずおり，レベルの差がもっとも激しいクラスであった（表５参照）。再履修生がクラスの４分の１を占め，クラスが二つに分かれてしまったということも不利な点であったと考えられる。

表４　達成度と授業の難易度

達成度の順位	クラス	達成度	難しい	易しい＋まあまあ
１　位	Ｅ	78％	38％	33％
２　位	Ａ	74％	39％	36％
３　位	Ｆ	67％	43％	36％
４　位	Ｂ Ｄ	58％ 58％	29％ 32％	54％ 42％
５　位	Ｃ	40％	37％	29％

表５　クラス別センター試験自己採点点の標準偏差値

Ａ＝22.25	Ｂ＝48.97	Ｃ＝16.37	Ｄ＝25.76	Ｅ＝19.58	Ｆ＝25.17

表５の他のクラスについても見てみよう。達成度が１位，２位のＥ，Ａクラスは，３位，４位のＦ，Ｂ，Ｄクラスと比べると，ややレベルがそろっている。センター試験の結果がすべての実力を決めるわけではないが，ここでは一つの目安として考えると，やはり学生の英語力のレベルはそろっている方が効果はあると言えるようである。その点Ｃクラスが最も粒

ぞろいなわけであるが，なぜ，目標の達成度が低かったのか。理由として考えられるのは，多人数クラスであったことと，以下のように複数の担当講師の教授法に違いがあったことが考えられる。

C（およびD）のクラスは，週2回，それぞれ別の日本人教師による英語の授業がある。学生のインタビューによると，C－1とC－2を担当する教師の教授法の違いが特に顕著であったために，学習方針の立て方に苦労した学生も多かったようである。一週間に行う授業の回数を増やし，それだけの効果を得るためには，教師間で協力して授業計画を立てるなどの連携が不可欠となる。英語に触れる時間は多いに超したことはないが，授業時間数を増やすことだけで，自動的に効果が上がるわけではないことがわかった。二人の教師が連携するティームティーチングのような方法が有効ではないか。英会話と英語クラスの人数および構成員が一致しているわけではないので，これは難しいとしても，少なくとも，二人の教師の教授法・教育方針を矛盾ないものにする必要がある。

達成度3位のFクラスは「茶髪にピアス」の学生が目立ち，教師は最初ぎょっとしたものだが，グループ討論でも，活発なやりとりがあり，元気な学生が多かった。学生が活発であるということは，一人一人がてんでばらばらに勝手なことをする危険性もあるが，その活発さが目的と結び付き，教師によってうまく方向づけられれば，むしろ，自発的で創造的な学習を行うなどの効果が期待できる。そういった点では，「おとなしく授業を聞くが，教師の指示を待たなければ何もしない学生」よりも有利かもしれない。ちなみにBとCクラスの学生はおとなしかった。Bクラスは学生のやる気を充分に引き出すことができなかったし，学生自身も「授業を受ける学生の態度が問題」と書いたように，そのことはわかっていたのである。Cクラスは真面目な優等生クラスという印象を教師は持っていた。

各々のクラスには違った個性があり，毎時間違った顔を見せる。各クラスの学習レベルや学習スタイルにあった指導法を採用する必要があるだろう。学生が，これまで受けて来た教授法の中で良い成績を上げて来たのだとしたら，彼等は，そういった教授法に慣れていると考えられるので，これまでの教授法に近いものを採用するのか，それとも学生の違った面を引き出す為に異なった教授法を採用するのか，学生が何を望み，また何が学生にとってベストなのかを教師は判断しなければならない。クラスの個性を見極め，それに合ったやり方で学生のやる気を引き出し動機づけすることが大切である。そのために教師はクラスの個性に合ったアプローチで学生とのラポール（信頼関係）を打ち立てることが必要である。実際的な事柄としては，その意味では当初の計画書―シラバスには，ある程度の柔軟性を持たせるのが良いかもしれない。

「まじめな優等生クラス」という仮面に教師は惑わされてはならない。静かでおとなしい授業態度が，学生の満足と学習効果をあらわすものではない。学生は，「冷めている（＝動機づけが足りない）」だけなのかもしれないし，また，コミュニケーションの基盤である語学の授業が静かではあまり意味がない。「まじめな受講態度」と思っても，年度の途中で学生のフィードバックを得，学生が教師についてきているかどうかを調べることが大切である。「油断は大敵」である。

さてCクラスは，少人数クラスにし，教官同士の連携を進め，年度の途中で学生のフィードバックを得ることによって，彼等に合った教授法を採用し，学生の動機づけを強力にする

更なる工夫をすれば，効果は上がったと考えられる。Bクラスについては，学生のレベルの開きを是正する方策を考えるべきであった。

ii．動機づけについて

さて，必修のクラスには，この授業を取りたくない学生も含まれており，実際「英語力を向上させようという教師の意図はわかるが，必修で仕方なくやっている学生にも課題を与えるのは酷である」という手厳しい意見もあった。課題の強制が教師の性格の悪さから行われていると理解する者もいることがわかり，教師は少なからずショックを受けたが，これらの学生の持つ雰囲気によって，教師のやる気を削がれたり，他の学生の動機づけが妨げられたりしないように注意しなければならない。また反対に，以下の引用のように，嫌いな物を無理やり食べさせられている学生の辛さも理解できる。選択したい学生だけが英語を選択するようにすれば，これは解決がつく。

大学のカリキュラム改革がいま進行中である。教育理念の再検討などに論議が集中しているが，私には，教育の「内容」よりも教育の「形」の改革のほうが急を要するように思われる。特に語学教育についてであるが，六十人に近い学生を前にして，教師が感じるやりきれなさを何とかしなくてはなるまい。学生二十人に教師一人という形を目指さない限り，どんなにすばらしい教育理念もただのお題目である。そして一段高い所から教師が教えるという形も改めるべきである。長円形のテーブルを囲んで，皆が同じ高さで勉強するというのが理想である。このような学習の形ができてはじめて教師の創意工夫も生きてくる。語学の少人数クラスの実現のためには，あらゆる外国語を選択科目にする必要がある。学生はどんな外国語も必要と思わなければやらなくてもよいことにするのである。その結果，ドイツ語の教室にはドイツ語を学ぼうという意欲を持った学生だけがいることになる。六十人の学生のうち約半数は英語の授業の間，死ぬほど退屈な思いをしている。嫌いな食物をむりに食わせられている彼らに罪はない。レストランのメニューのように彼らに選択権を与えれば解決する問題である。（朝日新聞1995年10月17日声欄より）

では，全員必修のクラスの中で，課題を与えるにはどうすればよいか。やりたい者だけが課題をやればよいことにすれば，どうだろう。これに対しては，「人は易きに流れるものだから強制される方が楽だ」という考え方もあるかもしれない。学生が自ら進んで勉強したくなるような授業をするか，そのように動機づけられれば，それが一番良いかもしれない。「学ぶこと自体が学生自身の報酬になる」「学ぶ喜びを知らしめる」ような授業が最も良い。英語は運用力をつけなければならないので，ある程度の機械的な訓練の部分も必要だが，そこに「できるようになった喜び」という経験を付加させられれば良いのではないか。Aクラスでは「達成感があり，やりがいがあった」「やってよかった」「大変だったが，結局それが自分の為になった」という声があがったが，自分が如何に授業に積極的にかかわれたかという点が大事で，これは結局「学生が動機づけられていた」「学生の興味関心が持続していた」ということである。あるクラスでは，学生は高い能力があるのにもかかわらず，自分から進んで勉強しなかったように見受けられた。学生もそのことをわかっており，「学生の学ぶ態

度が問題」という意見を書いてきた。動機づけの大切さが改めて強調される。

この授業で，学生の動機づけが起こったのは，次のような時である：
①興味のあるテーマである時，また自分が「表現したい」と思うテーマを与えられた時 ②自分が主体となって，考えながらやる課題を与えられた時 ③英語力が少しずつ向上しているという感触を得た時，この他にも ④やらなければ単位を落してしまうと考えた時 ⑤新しい知的な発見があった時 ⑥楽しめる作業の時 ⑦教師の体験談やテレビの海外取材番組等に触発され，興味を見い出せた時 ⑧与えられた課題が，自分の実力よりも少し上のものだと判断した時 ⑨課題が自分の為になるものだと納得できた時などあろう。この中で④は消極的な動機づけではあるが，それがきっかけで他の積極的な動機づけが生まれるなら，それも良いと思われる。あらゆる機会をとらえて，学生が動機づけられるよう仕向けるのが良い。10年度の授業では，学生の気持を汲み上げ，動機づけることに心を砕きたいと思う。

iii．学習環境のまとめ

ここで，今までの経過をまとめてみよう。効果的な学習を生む教育環境（クラスと学生）の要素としては，少なくとも次のようなものが上げられるだろう。①クラスの大きさ ②学習レベルの開き ③教師同士の連携 ④教師と学生のラポール ⑤学生の活発さ

各要素をクラスごとにまとめたのが表6である。

表6　達成度に関わる要素

	A	B	C	D	E	F
1．少人数クラス	＋	＋	－	－	＋	－
2．学習レベルの開きの少なさ	＋	－	＋	o	＋	o
3．教師同士のプログラムの連携	o	o	－	－	o	o
4．教師と学生のラポール	＋	－	－	＋	＋	＋
5．学生の活発さ	o	－	－	o	o	＋

＋プラスの要素がある　－マイナスの要素がある　oどちらともいえない

①に関しては，30人くらいまでの少人数クラスが良いことがうかがわれた。②同時にクラスの構成員の学習レベルがお互いに近い方が良い。③複数の教師が同一クラスを教える場合，統合的で一貫性のある教授法を採用するのがよい。逆に教師間で相反する教授法を採用すれば，授業時間数が増えても，かえって逆効果である。④⑤は，学生の動機づけと結び付く要素である。コミュニケーションが基盤の学習には，教師と学生の意志が通い合っていること（学生の気持を摑んでおり），学生は活発であることが有利である。

III．結　　論

A．授業方法・内容

学生にとって大事なのは次の点である。

1．学生の意識を開かせ，興味関心を持続させる
2．苦労をともなう学習プロセスを体験させる
3．自己表現と主体的・積極的に関わる

具体的には，授業で以下のことを心がけるのが良い。

1．毎回の授業の目標を設定し，学生に説明し，学習事項を学生の意識に上らせるのが良い。このことが学生の動機づけを促進するからである。
2．課題を充分与えて，英語離れしないようにするのが良い。ただし課題を与える時は，何故その課題をやるのかという目的をはっきり示し，学生が充分理解し納得できるようにしてやる（動機づける）のが効果的である。
3．作文や発表など自己表現に関わる課題で，学生が積極的に「表現したい」と思わせるテーマを与えるのが良い。これは，自己表現をするのに恥ずかしくない学習環境作りやグループ学習から始めるなどの工夫を同時に行う。

例えば「長年英語を勉強してきたのに使えない」という声を聞くが，「文法などをひととおり勉強した（興味関心を持っていても）」だけではだめなのである（興味関心を持たなければ，なおだめである）。語学を身につけるには，実際に活動させ使わせること（自己表現）が必要で，しかも上述の②の「苦労を伴う学習プロセスの体験」をある程度経なければならず，学習者自身が「主体的・積極的な関わり」を持ってはじめて達成感・満足感が得られる。それがなければ「苦労を伴う学習プロセス」は，単に苦痛を味わうだけのものになってしまうし，またそれでは「興味関心も持続」しない。

教える側から観点を変えて言えば，以下の3点をバランスよく配分した授業に心がけることが必要であるということが言える。

1．consciousness raising―「意識の高揚」。言語に対する意識を高めたり，知的な興味を引き出すこととその維持。授業や課題の方法と目的を提示することによって，学生の意識を開かせる。
2．automatization―実際に言語を使うことによる「自動化／取得化」を目指すことと，それによって学生に達成感を実感させる。
3．anxiety level control―ゲームや歌，グループ活動などによる非威嚇的雰囲気づくりと，実際に英語を使う場面に遭遇した時を想定し，葛藤を経験させる場面を教室内で提供するなど，教師の側の「不安度のコントロール」によって，学生の自己表現への積極的な参加を促す。

ただし，どの段階で上の3点のいずれを，どれくらいの割合で強調するのが効果的なのか，という点は今後の課題である。

B．学習環境

1．少人数クラスの方が目標の達成度が高い。
2．クラスの成員の学習レベルの開きは少ない方が良い。授業に対する要望などのアンケー

トは，結果を当事者である学生に反映することができるので，毎回の授業で或いは年度の途中で取るのが良い。

3．同一クラスを二人以上の教師が担当する場合は，なんらかの連絡を取って，連携プレーを行った方が効果的である。この作業を怠ると2倍時間をかけているのにも関わらず，逆効果になってしまう。

4．学生の動機づけが授業の成功のカギを握る。それには学生の気持を摑み，学生とのラポールを打ち立てるのが良い。

5．活発な学生はコミュニケーションが基盤の語学学習には有利である。教師がうまく方向づけをし，目標を見い出させれば，良い結果を生む。活発でない学生は，クラスを活性化させる方法を考え出す。

Ⅳ．最　後　に

効果的な授業方法と内容・学習環境について考えてきたが，上記に加え，教師自身が楽しみ，夢中になってできる授業が理想なのかもしれない。荒削りであろうと，少々の失敗があろうと，そのような教師の姿から学生は何かを学ぶはずだからである。その為には，教師は常に最良のコンディションで授業に臨む心構えができていなければならないし，教師自身が疲れていてはならない。教師が疲れていては，学生の動機づけなど遠い話しだからである。そういう意味では，学習環境に加え，教師の教育環境も保証されるべきであろう。また学生自身については，「何を，何故学ぶか」がしっかり理解されていれば，少々困難な課題も達成でき，満足感が得られる。そこまで行かなくとも，彼等にとって将来的に英語が必要となった時に取るべき方向を教えてくれ，「取っ掛かり」を与えてくれる授業であっても良いであろう。そして学生自身が考える授業も大切である。道具としての英語が使えるのは，これからの時代には必要であるが，中身がなければ道具も生きないからだ。

学生の動機づけの重要性は強調しても強調しすぎることはない。楽しい授業を提供できれば，それに超したことはない。学生も喜ぶ。が，表面的な楽しさだけで，後に何も残らなければ，授業をやった意味がなく，それで，学生を社会に送り出すのは気の毒というものである。苦しい作業を経て，何かを達成する経験を与えることも必要だが，その成功の為には，学生自身が動機づけられていなければ，効果が少ない。あらゆる機会をとらえて学生の動機づけをはかることが効果的な学習を生むこともわかった。大学受験という目標を失った学生をどう動機づけるのか。彼等が自分から目標を見い出すには，どう導いてやれば良いのか。選択クラスは学生が既にそこである程度動機づけられていることになるという意味で一考に値する。また「快適な学習環境を与え」「学生の動機づけを促進し」「効率的な授業を展開する」ひとつの方法として，スタッフつきのマルチメディア自習室のような設備が将来できればと願っている。学生は，高校時代は平均週5～7時間の英語の授業を受けてきている。その時間と同程度の学習時間を維持するには「授業で出された課題を，学生がここで自習する」などの方策を早急に考えるべきであろう。また，このスタッフつきマルチメディア自習室を拠点に，たとえば米国の大学のように，1年次の間に，その後の学年で必要となるスキル―「図書館で文献を捜す」「文献を読む」「レポートを書く」「人前で自分の意見を言う」

等一を一通り訓練するようなプログラムを展開するのはどうであろう。

今後は，もう少しorganizeされたカリキュラムと教師の連携が必要なのではないかと感じる。個性ある教師各々の活躍や工夫の余地を残し，各々の個性を生かすことは，教師のやる気を削がない為にも大切なことではあるが，学生に効果的な授業を提供するには，現場の教師が，情報を交換しあい，全体を見渡しながら，効果的なカリキュラムを協力して考える場も必要なのではないだろうか。

以上，本稿が信州大学の英語教育に多少なりとも貢献できれば喜びである。ご批判，ご教示をいただければ幸いです。

参考文献

川出才紀他．1985.「Monitor モデルの意義と問題点」英語教育　第34巻第5号　大修館

付　　録

平成10年度前期シラバス

授業の方針：この授業は，何かを教えてもらって，それをノートに写して，覚えて，試験に臨むのではなく，基本的に自分で考えて発見するという方針で行ってもらいます。語学はある程度，自分で苦しまなければ身につかないところがあります。楽して逃げていては身につきません。課題は多いかもしれませんが，英語は自分にとって必要だと考える人はクリアするようにして下さい。またそれ以外に自分で自由にやったことを見せてもらっても構いません。努力の跡が見られる創造的なもの大歓迎です。このクラスでは，「考える」ことと「自分で切り開いて勉強していく」ことを実践していってください。今，就職難ですが，企業は「自立しており」「創造的な仕事のできる」人を求めていると言われます。Yes man なんかではいられない。少々失敗しても構わないから，カッコつけないで，自分からどんどんやっていって下さい。人生は恥と失敗の連続です。その次やった時にちょっとうまくなっていればいいんです。自分の目標を決めて，最終的に笑えばいい。自分にとって何が必要か，どうやればうまくなるのかを考えて，今日からやってみよう。

4/16　授業内容紹介　テキストについて　年頭の決意文　グループ分け　砂漠ゲーム

4/23　1．self introduction（英語で3分程度の自己紹介）

　　2．テキスト「動詞がわかれば……（IN）」

1の目的・効果：クラス員に自分を知ってもらう。自分を如何にうまく表現するかを考える。今後の討論が活発なものになるようお互いによく知り合う。人前で発表することに慣れる。いろいろな人の英語を聞き取る。意見を聞き，要点をメモする。メモを見ながら，要点を他の人に伝える練習をする。

2の目的・効果：基本語の顔を明らかにすることによって，ことばに対する見方をかえます。また限られた数の前置詞と基本動詞を概観することによって，英語力が向上します。ことばについて考えることも目的です。

4/30　1．テキストA “TOEIC”

　　2．テキストB「動詞がわかれば……（ON）」

1の目的・効果：多くの企業で採用されているTOEICとはどのようなものかを知ってもらう。自宅でテープを繰り返し聞いてもらい，リスニング力の向上をはかる。

5/ 7　1．テキストC　Lesson 1

2．「動詞がわかれば……（AT）」

目的・効果：英語の文章を速読し，必要な情報を摑む練習をする。わからない単語があっても前後関係から類推し，キーワードのみ辞書で引く習慣をつける。練習問題によって，より詳しく文章を把握する。グループで内容について討論し，「考える習慣をつける」「様々な意見に耳を傾ける」「自分の意見を整理する」「自分の意見をいかに効果的に伝えられるか考える」「人前で意見を言うことに慣れる」「異なる意見が相手を個人攻撃することではないことを理解する」「意見が違ってもグループで一緒にやっていけることを体験してみる」「異なる意見の調整をはかり，よりよい結果を引き出す経験を積む」。

5/14　1．テキストC　Lesson（2）

2．「動詞がわかれば（ABOVE, OVER）」

5/21　調整日（遅れた分を取り戻すなどします。）

5/28　1．テキスト　C　Lesson（4）

2．「動詞がわかれば（UNDER, BELOW）」

6/ 4　1．テキストC　Lesson（9）（10）

6/11　1．テキストC　Lesson（12）（14）

6/18　1．小テスト　2．テキストC　Lesson（18）

1の目的・効果:英語離れしないことによって，英語力を効率的に持続・向上させる。

6/25　1．小テスト　2．テキストC　Lesson（19）

7/ 2　1．小テスト　2．テキストC　Lesson（22）

7/ 9　1．試験（テキストC　1,2,4,9,10,12,14,18,19,22から音読）

2．self introduction レポートと一覧表提出

3．ネットサーフィンレポート（英語）を提出

4．テキストC　意見・感想提出

1の目的・効果：英語は比較的音重視の言語と言えるので，前期は発音を重視します。発音できる音は聞き取れるので，聞き取りの基礎を固める。人前で話すことが億劫にならないように，普段から声を出す練習をしておく。音読がすらすらできれば黙読も早くできるようになる。

3の目的・効果：自分で苦労して面白そうな情報を手にいれる。効果的に人に伝えるには，どのような表現，文の構成にすればいいかを考える。パソコンに慣れる。

4の目的・効果：ことばとは，相手を説得する為のものである。思ったことを如何にうまく相手につたえるか，効果的な文章の構成・表現を考えて書く。

7/16　試験（テキストC　1,2,4,9,10,12,14,18,19,22から音読）

7/23　調整日（遅れた分を取り戻すなどします。）

以上，変更もあり得ます。

・後期は書くことにも重点を置きます。

・評価：平常点30前期，テスト及び試験40前期，レポート30％

60―69点＝可，70―79＝良，80―100＝優・遅刻は3回で欠席1回に換算します。3分の1（5回）以上欠席しないように注意して下さい。

提出物チェック欄

1．自己紹介英文レポート　（　）
2．自己紹介評価・内容メモ一覧表　（　）
3．ネットサーフィンレポート　（　）
4．テキストC　意見・感想　（　）
5．その他の課題　（　）